

一利己主義者と友人との対話

石川啄木

青空文庫

B おい、おれは今度また引越しをしたぜ。

A そうか。君は来るたんび引越しの披露ひろうをして行くね。

B それは僕には引越し位の外に何もわざわざ披露するような事件が無いからだ。

A 葉書でも済むよ。

B しかし今度のは葉書では済まん。

A どうしたんだ。何日いつかの話の下宿の娘から縁談でも申込まれて逃げ出したのか。

B 莫迦ばかなことを言え。女の事なんか近頃もうちつとも僕の目にうつらなくなつた。女より食物くいものだね。好きな物を食つてさえ

いれあ僕には不平はない。

A 殊勝な事を言う。それでは今度の下宿はうまい物を食わせるのか。

B 三度三度うまい物ばかり食わせる下宿が何処どこにあるもんか。

A 安下宿ばかりころがり歩いた癖に。

B 皮肉るない。今度のは下宿じゃないんだよ。僕はもう下宿生活には飽き飽きしちやった。

A よく自分に飽きないね。

B 自分にも飽きたさ。飽きたから今度の新生活を始めたんだ。

^{へや}室だけ借りて置いて、飯は三度とも外へ出て食うことにしたんだよ。

たくなるんだ。

A 飯の事をそう言えや眠る場所だつてそうじゃないか。毎晩毎晩同じ夜具を着て寝るつてのも余り有難いことじゃないね。

B それはそうさ。しかしそれは仕方がない。身体からだ一つならどうでも可いが、机もあるし本もある。あんな荷物をどつさり持つて、毎日毎日引越して歩かなくちゃならないとなつたら、それこそ苦痛じゃないか。

A 飯のたんびに外に出なくちゃならないというのと同じだ。

B 飯を食いに行くには荷物はない。身体だけで済むよ。食いたいなあと思つた時、ひよいと立つて帽子を冠かぶつて出掛けるだけだ。財布さえ忘れなげや可い。ひと足ひと足うまい物に近づい

て行くつて気持は実に可いね。

A ひと足ひと足新しい眠りに近づいて行く気持はどうだね。あ
あ眠くなつたと思つた時、てくてく寢床を探しに出かけるんだ。
昨夜は隣ゆうべの室で女の泣くのを聞きながら眠つたつけが、今夜は
何を聞いて眠るんだろうと思ひながら行くんだ。初めての宿屋
じゃ此方こつちの誰だかをちつとも知らない。知つた者の一人もいな
い家の、行燈あんどんか何かついた奥まった室に、やわらかな夜具の
中に緩ゆるくり身体を延ばして安らかな眠りを待つてる気持はどう
だね。

B それあ可いさ。君もなかなか話せる。

A 可いだろう。毎晩毎晩そうして新しい寢床で新しい夢を結ぶ

んだ。(間) 本も机も棄てつちまうさ。何もいらぬ。本を読んだってどうもならんじやないか。

B ますます話せる。しかしそれあ話だけだ。初めのうちはそれで可いかも知れないが、しまいにはきつとおつくうになる。やっぱり何処かに落付いてしまふよ。

A 飯を食いに出かけるのだからさうだよ。見給え、二日経つと君はまた何処かの下宿にころがり込むから。

B ふむ。おれは細君を持つまでは今の通りやるよ。きつとやってみせるよ。

A 細君を持つまでか。可哀想に。(間) しかし羨ましいうらやね君の今のやり方は、実はずっと前からのおれの理想だよ。もう三年

からになる。

B そうだろう。おれはどうも初め思いたった時、君のやりそう
なこつたと思つた。

A 今でもやりたいと思つてる。たった一月でも可い。

B どうだ、おれん処へ来て一緒にやらないか。可いぜ。そして
飽きたら以前もとに帰るさ。

A しかし厭いやだね。

B 何故。おれと一緒に厭なら一人でやっても可いじゃないか。

A 一緒でも一緒にでなくても同じことだ。君は今それを始めたばかり
かりで大いに満足してるね。僕もそうに違いない。やっぱり初
めのうちは日に五度たびも食事をするかも知れない。しかし君はそ

のうちに飽きてしまっておつくうになるよ。そうしておれん処へ来て、また引越しの披露をするよ。その時おれは、「とうとう飽きたね」と君に言うね。

B 何だい。もうその時の挨拶あいさつまで工夫くふうしてるのか。

A まあさ。「とうとう飽きたね」と君に言うね。それは君に言うのだから可い。おれは其奴そいつを自分には言いたくない。

B 相あいかわらず不変厭な男だなあ、君は。

A 厭な男さ。おれもそう思ってる。

B 君は何日か——あれは去年かな——おれと一緒に行って淫いんば売屋いばやから逃げ出した時もそんなことを言った。

A そうだったかね。

B 君はきつと早く死ぬ。もう少し気を広く持たなくちや可かんよ。一体君は余りアンビシヤスだから可かん。何だつて眞の満足つてもものは世の中に有りやしない。従つて何だつて飽きる時が来るに定^{きま}つてらあ。飽きたり、不満足になつたりする時を予想して何にもせずにいる位なら、生れて来なかつた方が余つ程可いや。生れた者はきつと死ぬんだから。

A 笑わせるない。

B 笑つてもいないじやないか。

A 可笑^{おか}しくもない。

B 笑うさ。可笑しくなくつたつて些^{ちつ}たあ笑わなくちや可かん。

はは。(間) しかし何だね。君は自分で飽きっぽい男だと言つ

てるが、案外そうでもないようだね。

A 何故。

B あいかわらず相不変歌を作ってるじゃないか。

A 歌か。

B や止めたかと思うとまた作る。執念深いところが有るよ。やっぱり君は一生歌を作るだろうな。

A どうだか。

B 歌も可いね。こないだ友人とこへ行ったら、やっぱり歌を作るとか読むとかいう姉さんがいてね。君の事を話してやったら、「あの歌人はあなたのお友達なんですか」って喫驚びっくりしていたよ。おれはそんなに俗人に見えるのかな。

A 「歌人」は可かったね。

B 首をすくめることはないじゃないか。おれも実は最初変だと思つたよ。Aは歌人だ！ 何んだか変だものな。しかし歌を作つてる以上はやっぱり歌人にや違いないよ。おれもこれから一つ君を歌人扱いにしてやろうと思つてるんだ。

A 御馳走ごちそうでもしてくれるのか。

B 莫迦ばかなことを言え。一体歌人にしろ小説家にしろ、すべて文学者といわれる階級に属する人間は無責任なものだ。何を書いても書いたことに責任は負わない。待てよ、これは、何日いつか君から聞いた議論だったね。

A どうだか。

B どうだかつて、たしかに言ったよ。文芸上の作物は巧うまいにしろ拙ますいにしろ、それがそれだけで完了してると云う点に於て、人生の交渉は歴史上の事柄と同じく間接だ、とか何んとか。

(間) それはまあどうでも可いが、とにかくおれは今後無責任を君の特権として認めて置く。特待生だよ。

A 許してくれ。おれは何よりもその特待生が嫌きらいなんだ。何日だっけ北海道へ行く時青森から船に乗ったら、船の事務長が知ってる奴だったものだから、三等の切符を持つてるおれを無理矢理に一等室に入れたんだ。室だけならまだ可いが、食事の時間になつたらボーイを寄こしてとうとう食堂まで引張り出された。あんなに不愉快な飯を食ったことはない。

B それは三等の切符を持っていた所^{せい}為だ。一等の切符さえ有れ
あがり前じやないか。

A 莫^ぼ迦^かを言え。人間は皆赤切符だ。

B 人間は皆赤切符！ やつぱり話せるな。おれが飯屋へ飛び込
んで空^{あき}樽^{たる}に腰掛けるのもそれだ。

A 何だい、うまい物うまい物つて言うから何を食うのかと思つ
たら、一膳飯屋へ行くのか。

B 上^{かみ}は精養軒の洋食から下^{しも}は一膳飯、牛飯、大道の焼鳥に至る
さ。飯屋にだつてうまい物は有るぜ。先^{さつ}刻^き来る時はとろろ飯を
食つて来た。

A 朝には何を食う。

B 近所にミルクホールが有るから其処そこへ行く。君の歌も其処で

読んだんだ。何でも雑誌をとつてる家だからね。(間) そうそう、君は何日か短歌が滅びるとおれに言ったことがあるね。この頃その短歌滅亡論という奴が流行はやつて来たじゃないか。

A 流行るかね。おれの読んだのは尾上柴舟おのえさいしゅうという人の書いたのだけだ。

B そうさ。おれの読んだのもそれだ。然しかし一人が言い出す時分にや十人か五人は同じ事を考えてるもんだよ。

A あれは尾上という人の歌そのものが行きづまって来たという事実うらがきに立派な裏書うらがきをしたものだ。

B 何を言う。そんなら君がああ議論を唱えた時は、君の歌が行

きづまった時だったのか。

A そうさ。歌ばかりじゃない、何もかも行きづまった時だった。

B しかしあれには色色理窟りくつが書いてあった。

A 理窟は何にでも着くさ。ただ世の中のことは一つだって理窟によつて推移していないだけだ。たとえば、近頃の歌は何首あるい或は何十首を、一首一首引き抜いて見ないで全体として見るような傾向になつて来た。そんなら何故なぜそれらを初めから一つとして現さないか。一一分解して現す必要が何処にあるか、とあれに書いてあつたね。一応もつと尤もに聞えるよ。しかしあの理窟に服従すると、人間は皆死ぬ間際まぎわまで待たなければ何も書けなくなるよ。歌は——文学は作家の個人性の表現だということを狭く

解釈してるんだからね。仮に今夜なら今夜のおれの頭の調子を歌うにしてもだね。なるほどひと晩のことだから一つに纏めて現した方が都合は可いかも知れないが、一時間は六十分で、一分は六十秒だよ。連続はしているが初めから全体になっているのではない。きれぎれに頭に浮んで来る感じを後から後からときれぎれに歌ったって何も差さ支しえつがかないじゃないか。一つに纏める必要が何処にあると言いたくなるね。

B 君はそうすつと歌は永久に滅びないと云うのか。

A おれは永久という言葉は嫌いだ。

B 永久でなくても可い。とにかくまだまだ歌は長なが生いきすると思
うのか。

A 長生はする。昔から人生五十というが、それでも八十位まで生きる人は沢山ある。それと同じ程度の長生はする。しかし死ぬ。

B 何日になったら八十になるだろう。

A 日本の国語が統一される時さ。

B もう大分統一されかかっているぜ。小説はみんな時代語になった。小学校の教科書と詩も半分はなつて来た。新聞にだって三分の一は時代語で書いてある。先を越してローマ字を使う人さえある。

A それだけ混乱していたら沢山じゃないか。

B うむ。そうすつとまだまだか。

A まだまだ。日本は今三分の一まで来たところだよ。何もかも

三分の一だ。所謂いわゆる古い言葉と今の口語と比べてみても解る。

正確に違つて来たのは、「なり」「なりけり」と「だ」「であ
る」だけだ。それもまだまだ文章の上では併用されている。音
文字んもじが採用されて、それで現すに不便な言葉がみんな淘汰とうたされ
る時が来なくちや歌は死なない。

B 気長い事を言うなあ。君は元来性せつ急かちな男だったがなあ。

A あまり性急かげだったお蔭かげで気長になつたのだ。

B 悟さとつたね。

A 絶望ぜつぼうしたのだ。

B しかしとにかく今の我々の言葉が五とか七とかいいう調子を失

ってるのは事実じゃないか。

A 「いかにさびしき夜なるぞや」「なんてさびしい晩だろう」

どっちも七五調じゃないか。

B それは極めて稀まれな例だ。

A 昔の人は五七調や七五調でばかり物を言っていたと思うのか。

莫迦。

B これでも賢いぜ。

A とはいうものの、五と七がだんだん乱れて来てるのは事実だね。五が六に延び、七が八に延びている。そんならそれで歌にも字あまりを使えば済むことだ。自分が今まで勝手に古い言葉を使つて来ていて、今になって不便でもないじゃないか。なる

べく現代の言葉に近い言葉を使つて、それで三十一字に纏まとりかねたら字あまりにするさ。それで出来なければ言葉や形が古いでなくつて頭が古いんだ。

B それもそうだね。

A のみならず、五も七も更に二とか三とか四とかにまだまだ分解することが出来る。歌の調子はまだまだ複雑になり得る余地がある。昔は何日いつの間にか五七五、七七と二行に書くことになつていたので、明治になつてから一本に書くことになつた。今度はあれを壊こわすんだね。歌には一首一首各異おのおのつた調子がある筈はずだから、一首一首別なわけ方で何行かに書くことにするんだね。

B そうすると歌の前途はなかなか多望なことになるなあ。

A 人は歌の形は小さくて不便だというが、おれは小さいから却かえつて便利だと思つている。そうじゃないか。人は誰でも、その時が過ぎてしまえば間もなく忘れるような、乃至ないしは長く忘れずにいるにしても、それを言い出すには余り接穂つきほがなくてとうとう一生言い出さずにしまうというような、内から外からの数限りなき感じを、後から後からと常に経験している。多くの人はそれを軽蔑けいべつしている。軽蔑しないまでも殆ど無関心ほとんにエスケープしている。しかしいのちを愛する者はそれを軽蔑することが出来ない。

B 待てよ。ああそうか。一分は六十秒なりの論法だね。

A そうさ。一生に二度とは帰つて来ないのちの一秒だ。おれ

はその一秒がいとしい。ただ逃がしてやりたくない。それを現すには、形が小さくて、てまひま手間暇のいらぬ歌が一番便利なのだ。実際便利だからね。歌という詩形を持つてるということは、我々日本人の少ししか持たない幸福のうちの一つだよ。(間)おれはいのちを愛するから歌を作る。おれ自身が何よりも可愛いから歌を作る。(間)しかしその歌も滅亡する。理窟からでなく内部から滅亡する。しかしそれはまだまだ早く滅亡すれば可いと思うがまだまだだ。(間)日本はまだ三分の一だ。

B いのちを愛するつてのは可いね。君は君のいのちを愛して歌を作り、おれはおれのいのちを愛してうまい物を食つてあるく。似たね。

A (間) おれはしかし、本当のところはおれに歌なんか作らせたくない。

B どういう意味だ。君はやっぱり歌人だよ。歌人だって可いじやないか。しつかりやるさ。

A おれはおれに歌を作らせるよりも、もつと深くおれを愛している。

B 解らんな。

A 解らんかな。(間) しかしこれは言葉でいうと極くつまらんことになる。

B 歌のような小さいものに全生命を託することが出来ないというのか。

A おれは初めから歌に全生命を託そうと思ったことなんか無い。

(間) 何にだって全生命を託することが出来るもんか。(間)

おれはおれを愛してはいるが、そのおれ自身だってあまり信用してはいない。

B (やや突然に) おい、飯食いに行かんか。(間、独語するよ
うに) おれも腹のへった時はそんな気持のすることがあるなあ。

青空文庫情報

底本：「石川啄木集（下）」新潮文庫、新潮社

1950（昭和25）年7月15日発行

1970（昭和45）年6月15日25刷改版

1991（平成3）年3月5日48刷

底本の親本：「啄木全集第4巻 評論 感想」筑摩書房

1967（昭和42）年9月30日

初出：「創作 第一巻第九号」

1910（明治43）年11月1日

入力：青空文庫

校正：鈴木厚司

2004年8月11日作成

2016年4月26日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

一利己主義者と友人との対話

石川啄木

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>